

2026.9.2

お茶高 SSH 企画「研究者にインタビューしてみよう」は、様々な分野で活躍する研究者に生徒がアポイントをとってインタビューし、そこで得たものをまとめ、全校生徒に向けて発信するプロジェクトです。ここでは1年生4名が2026年8月5日、昭和女子大学人間社会学部心理学科 田中奈緒子先生にインタビューした内容をご紹介します。

○田中奈緒子先生(昭和女子大学人間社会学部心理学科／同学部長)

昭和女子大学人間社会学部心理学科教授・学部長として、臨床心理学および犯罪心理学の研究・教育に取り組んでいらっしゃいます。中でも、非行少年の更生支援や社会復帰支援、矯正教育に関する研究を専門とし、実践と理論の双方から人の成長と社会適応について、公認心理師・臨床心理士としての豊富な経験を生かし、教育・福祉・司法の各分野をつなぐ研究者として活躍されています。

「非行少年」は特別な存在ではないー少年のつまずきと、その先を研究するー ー先生は現在、どのような研究をされていますか？

主に、思春期・青年期の不適応について研究しています。
特に、非行を経験した人たちが、その後どのように立ち直り、社会生活を送っていくのか、ということに関心があります。もともと私は千葉県警察で心理職として勤務し、警察本部の少年課に所属していました。そこで非行少年と関わる中で、そういった少年たちへの支援をより深く考えるようになったのです。大学の教員になってからは、直接 非行少年と関わる機会は少なくなりましたが、矯正教育に関する研究チームの一員として、法務省の協力を得て、全国の少年院にいる少年たちを対象にアンケート調査を行ったこともあります。そうした調査を通して、少年院での生活や矯正教育が少年たちにとってどのような意味を持つのか、また、出院後の支援のあり方についても研究しました。



ーなぜ、非行を経験した少年たちの「その後」に注目しているのでしょうか？

非行を経験した人たちは、どこかでつまずいているわけですね。そこから立ち直ることができないと、その後の社会生活がうまくいかないことがあります。そのため、「どのような支援が有効か」を明らかにしていくことが大切だと思っています。実際に彼らと関わってきて、彼らにはすごくエネルギーがあり、変わっていける力があると感じています。

ー「非行少年」というと、自分たちとは違う特別な人だと考えてしまうこともあると思います。

思春期・青年期というのは、もともと身体的にも精神的にも不安定になりやすい発達段階であり、一人ひとり置かれている環境が異なり、そうした中で非行に至る人たちがいます。彼らは私たちと質的な違いがあるわけではありません。実際、青少年の非行の大半は一過性です。だから、「この子は非行少年だからこうなんだ」と決めつけるのではなくて、なぜその子が非行に至ったのか、その背景を見ていく必要があります。

—なぜ心理学分野、特に少年の非行に興味を持ったのですか？

大学では教育学部で教育心理学を専攻していました。そこでのゼミの先生が、法務省で長く心理職をされ、大学に移ってこられた方で、そこで初めて「そんな仕事があるんだ」と知りました。最初から「絶対に非行関係の仕事に就きたい」と思っていたわけではありませんが、非行には興味がありましたし、当時は今よりも女性が働く上で制約が多い時代だったので、民間企業に勤めるよりは公務員のような仕事のほうが自分には合っているかなと思っていました。最終的に、千葉県警察の心理職に就くことになりました。

—そこから、なぜ大学の教員になったのですか？

警察の心理職は実務だけでなく調査研究も仕事の一部でした。警察に補導された少年を対象に調査を行うなど、警察というフィールドにいるからこそ可能な研究にも取り組むことができ、次第に研究の面白さを感じるようになりました。その後、大学で研究・教育に携わらないかというお話をいただき、大学教員になりました。

—研究者になるにはどうしたらよいのですか？

研究者になる道はいろいろあります。大学を卒業した後、大学院の修士課程や博士課程に進んで研究を続け、大学教員になったり、研究機関などの研究者として働いたりする人もいます。一方で、心理学の分野を例にとると、病院、教育相談機関、司法・矯正機関などで仕事をしながら研究を続け、そうした実務経験を活かして、その後大学で教育や研究に携わる人もいます。

—現場で働きながら研究する場合と、大学教員として研究する場合では、どのような違いがありますか？

現場で働きながら研究している人は、業務の合間に研究をしなければなりません。研究会や学会に参加するときも、職場から費用が出るとは限りません。自分で費用を負担したり、有給休暇を使ったりすることもあります。それに比べ、大学教員は研究環境が比較的整っています。研究設備を利用でき、大学内外の研究費を活用することもできます。これは、大学教員にとって、授業や学生指導と同じように、研究も仕事の一つだからです。

—女性研究者として、研究の世界で何か感じることはありますか？

私自身は、発言が軽く扱われたり、研究者として不利に扱われたりしたと感じたことはありません。心理学という分野に女性が多いことや、女子大学で働いてきたことも影響しているのかもしれませんが。

—女子大学で学ぶことには、どのようなメリットがありますか？

女子大学だからといって、女子向けの特別な内容を学んでいるわけではありません。学ぶ内容そのものは、共学の大学と変わりません。一方で、女子大学では、性別による固定的な役割分担にとらわれず、さまざまな役割を経験できます。「リーダーは男性で、女性はそれを支える役」というようなイメージにとらわれず、企画をしたり、人をまとめたりする役割を自分たちで担います。そうした経験を重ねる中で、自分の可能性や得意なことに気づくことがあると思います。また、女性教員や卒業生などを身近なロールモデルにできることも、女子大学の特徴の一つです。「女性だから」という理由で自分の可能性を狭めることなく、将来について幅広く考えられる環境があることは、女子大学で学ぶ意義の一つだと思います。

—最後に、高校生に伝えたいことはありますか？

まずは、ちょっと勉強してから、いろいろなことを体験してみしてほしいですね。そこで「面白い」と思うのか、「あまり面白くない」と思うのか、自分がどう感じるのかを大切にしてほしいです。学ぶと、それまで見えていなかったものが見えるようになって、世界が広がっていきます。同じ世界を見ていても、知識があることで違うものが見えてくる。そのこと自体が、学ぶことの面白さだと思います。これから社会を担っていく皆さんには、ぜひその「面白さ」を見つけてほしいです。自分が「面白い」と思えるものを探してみれば、「これだ」と思えるものが見つかるはずですよ。だから、「ちょっと勉強してから体験してみる」。それを大事にしてほしいですね。

田中先生、お忙しい中ありがとうございました！